化学物質の環境リスクに関する国際シンポジウム
２００６／１１／１４　釧路市観光国際交流センター

リスクのモノサシの提案

中谷内 一也
(帝塚山大学 心理福祉学部)

リスクコミュニケーションの強調点

- 一般国民を交えたリスク情報の共有が重要
- 定量的な視点が重要

まとめると、「定量的なリスク情報を、一般国民を含めた関係者間で共有することが重要」となる。

では、そのような状況が整えられてきたか？

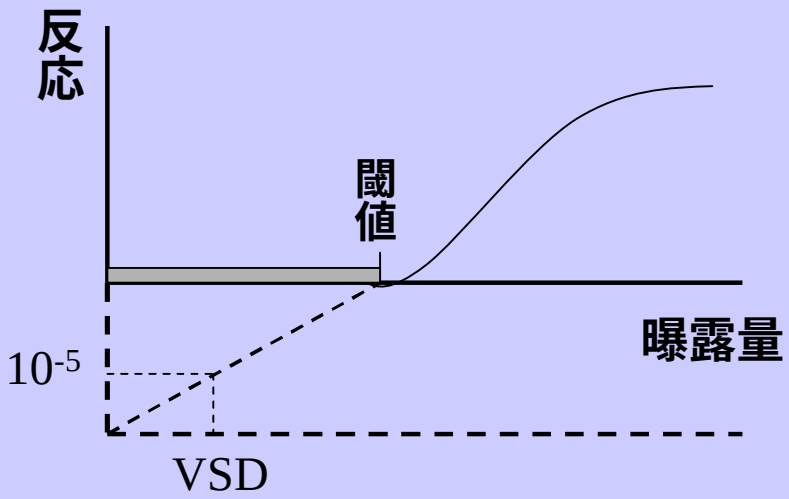
→　十分には整えられてはいないと思う

何が不十分なのか？

- 一般国民を交えたリスク情報の共有か？
  →情報開示は進んできていると思う
- 定量的な視点か？
  →定量的な情報も開示はされている

足らないのは、わかりやすく、国民の関心に応じた定量的情報ではないか。
ところが、日常で接するリスク情報は“専門家”からのものも含めて「リスクがあるか・ないか」という定性的なケースが多い

リスクがあるか･ないかという問題設定の矛盾



低線量放射線被曝に代表されるように発癌に関しては、疫学調査や動物実験では閾値があっても、グレイ部分にリスクがあると仮定して、基準を設定している。

リスクという概念を使う以上、「リスクがあるかどうか」という問題の立て方はおかしい。

・にもかかわらず、「絶対に安全とはいえない」という、リスク概念を使うなら自明のことを声高に主張し、（正義感からか）国民の不安を煽る専門家がいる。

・一方で、「リスクはないので、ご安心を」、「絶対に事故は起こしません」と説得にかかる責任者もいる。

・マスメディアの情報発信も同様の傾向

→ これらが判断のヒューリスティクスと相まって社会的な“騒動”を導く

なぜ、このような状態が改善されないか？

・二値的判断の低認知負荷、対処行為の容易さ

・<u>程度を伝えるための取り組みの立ち遅れ</u>

新規な事物の“程度”を伝えるための有力な方法

→ 既知の事物と比較する相対化
（例：凶器の大きさを示すためのタバコ箱、歴史年表）

しかし、これまでリスク比較はあまり受け入れられなかった。
主な理由は、恣意的に比較対象が設定されるから
（例：米産輸入牛肉の脊柱混入時のペン農務次官発言）

だからといって「相対化による程度の表現」が役に立たない
というわけではない。
ならば、恣意的ではない相対化を工夫すればどうか。

リスクを定量的にわかりやすく伝えるための

標準化された「リスクのモノサシ」の提案

一定のリスク比較セットを作成し、リスクの大きさを示すとき、情報の送り手がその中に位置づけて示す。

ガン	250
自殺	24
クボタ旧神崎工場周辺居住歴女性の中皮腫	12.9
交通事故	9
火事	1.7
自然災害	0.1
落雷	0.002

(10万人あたりの年間死亡者概数)

リスクのモノサシ使用例

BSEのリスク

ガン	250
自殺	24
交通事故	9
火事	1.7
自然災害	0.1
落雷	0.002
牛肉食による	
vCJD	＞0

(10万人あたりの年間死亡者概数)

入浴のリスク

ガン	250
自殺	24
交通事故	9
入浴中の水死	2.4
火事	1.7
自然災害	0.1
落雷	0.002

(10万人あたりの年間死亡者概数)

予想される問題点

・健康影響や環境影響を考慮しないのか？

→ 人命が何より大切なのだから、まずはそれをエンドポイントとしたモノサシを考えた

今回の年間死亡統計に基づくモノサシは「わかりやすさ」で優れている。だが、これがベストかどうかは分からない。例えば、損失余命に基づくモノサシの方が汎用性は高いだろう。

リスクのモノサシは国民の理解をサポートするための工夫なのだから、一般国民を対象とした社会調査でどのような仕様が適切かを検討すればいい